



山口恭平
主任理学療法士

ことが近年分かってきた。
山梨県立中央病院はリハビリの受け入れ体制を充実させて対応。将来的には大動脈弁狭窄症の新しい治療

医療
ましまし
やな

最前線

県立中央病院から
〈313〉

高齢化に伴って増加している心不全の患者に対し、ただ安静にさせず、専門家の指導の下での適度な運動が有効になるケースが多い

心不全患者 適度な運動有効 体制充実、再入院減らす



法を導入する予定で、さらなるリハビリ需要の高まりを見込む。
病院によると、心不全患者の場合、運動することで体力や筋力がつき、血液の循環をよくして心臓の負担を減らすことができる場合が多い。病気の悪化を防ぐことで、再入院の減少につながる。こうしてリハビリを「心臓リハビリテーション（心リハ）」と呼び、病院は2021年9月に導入した。

具体的には、急性期患者の心電図や血圧を測定しつつ、手術や入院の直後からリハビリに入る。手足の筋トレや歩行訓練など、身体機能の低下を抑えるための運動に取り組んでもらう。

退院後に質の高い生活を過ごしてもらうため、運動療法だけでなく、多職種と連携した食事・服薬指導なども行う。カウセリングも実施し、心身が衰える「フレイル（虚弱）」予防につなげる。

県立中央病院で24年度に心リハを受けた患者は532人。心リハ導入初年度から右肩上がりとなっている。リハビリテーションセンター主任理学療法士の山口恭平さんは「スタッフが増やし、リハビリが必要なお患者の洗い出しを進めます」

「できたことが要因」と分析する。

将来的には大動脈弁狭窄症の治療として、カテーテルを使って心臓に人工弁（生体弁）を植え込む「経カテーテル的大動脈弁置換術」（TAVI）を導入予定。従来の開胸手術では負担が大きく、適応できなかった高齢患者やフレイル患者にも対応できる。こうした患者は体力や筋力がより落ちているため、心リハの需要はさらに高まると見込んでいる。

病院では心リハに携わる人材の育成をさらに進める考えだ。山口さんは「心臓病患者に手厚いリハビリを提供することで、入退院の繰り返しを防ぎたい」と話している。

第2、4火曜日に掲載します